



川上高司

● 1 ●

安倍外交の

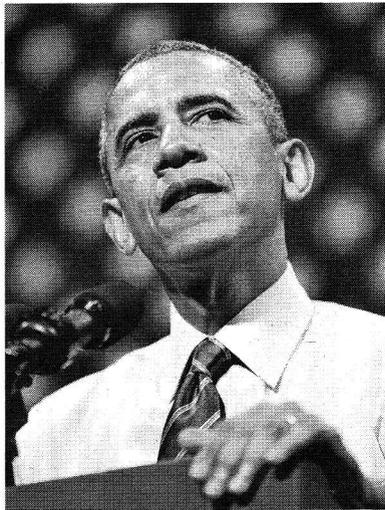
挑戦

地政学の復活

米国が「世界の警察官」の座から降りたため、「力の真空」地帯が世界各地に現れ、「地政学」が復活した。米国(シー・パワー)は、ソ連(ランド・パワー)との「冷戦」に勝利して世界秩序を形成・維持してきた。しかし、「シー・パワー」の長たる米国がいなくなったため、「ランド・パワー」であるロシアと中国の力が浸透しつつある。

地政学は、18世紀にドイツの哲学者、カントにより「地理的事実を政治に応用する」と体系化した。19世紀に米海軍軍人で戦略研究者であるアル

米は「戦いを放棄」 新たな「シー・パワー連合」を



かわかみ・たかし 1955年、熊本県生まれ。拓殖大学海外事情研究所所長。大阪大学博士(国際公共政策)。フレッチャースクール外交政策研究所研究員、世界平和研究所研究員、防衛庁防衛研究所主任研究員、北陸大学法学部教授などを経て現職。著書に、「米軍の前方展開と日米同盟」(同文館出版)、「アメリカ世界を読む―歴史を作ったオバマ」(創成社)など。

フレッド・T・マハンの「シー・パワー論」(海を制するものは世界を制す)や、英政治家で地理学者であるハルフォード・マッキンダーの「ランド・パワー論」(ハートランド・ユーラシア大陸を制するものは世界を制す)という、二大の潮流に分かれた。

問題は、「地政学の復活」という現状に、「シー・パワー」である米国はどうか対応するか。ブレジンスキー元米大統領補佐官は、米国がユーラシア大陸をどう管理するかが重要で、それができ

「シー・パワー」の盟主として力量が問われるオバマ米大統領(AP)はどうか対応するか。ブレジンスキー元米大統領補佐官は、米国がユーラシア大陸をどう管理するかが重要で、それができ

スの中国への大型供給契約を締結した。これで今後30年間、中国は天然ガスの安定供給を確保し、ロシアは安定収入を得る。中ロの戦略関係が強固となればハートランドに「ユーラシア同盟」が出現することになる。ユーラシア大陸の南部の中東では、イランが「リビジョンニスト・パワー」(現状打破国)として台頭している。イラン

中ロ「ランド・パワー」台頭

ユーラシア大陸の東部では、中国が韓国を手中に収めようと布石を打つ。その状況を、米フォーブス誌(7月3日付)は「中国、日本、北朝鮮、韓国間の『同盟の組み替え』が起こりつつあり東アジアで、パワーゲームが始まった」とし、「中韓を異常接近させ、日韓離反を招いたオバマ大統領の無能さ」を批判した。